

# A c a n t h u s

第 2 3 号

平成 2 2 年 4 月 2 0 日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会日本館活用委員会

去る 4 月 11 日 ( 日 ) , 今年度の進修同窓会総会が開かれました。応援指導部・吹奏楽部・弦楽部の皆さんによる一高讃歌・応援歌や校歌の演奏で始まり、生徒活動特別補助費などを含む本年度事業・予算等が審議・可決されました。海外研修報告もありました。総会に続いて毎年恒例の周年祝賀式が挙行され、卒業 60・50・40・25・15 周年にあたる会員が列席されました。



## 戦後の土浦中学校

来る 4 月 22 日は本校の百十三回目の創立記念日です。明治 30 年 4 月 22 日に、茨城尋常中学校 ( 現水戸一高 ) 土浦分校として土浦城本丸の仮校舎で授業を開始したのです。三年後に土浦中学校として独立するわけですが、中学校創立当初の様子については、( 下 ) 左まじり Acanthus で度々取り上げてきましたので、今回は戦後の土中から新制土浦一高への移行期に新しい学校の指針確立を目指した新校訓制定の経緯を紹介したいと思います。

今年卒業 60 周年を迎えられた方々は戦時中の昭和 19 年 ( 1944 ) 4 月に土浦中学校に入学しました。一日のほぼ半分は体操・軍事教練・武道や作業などでしたが、英語も含めて授業は行われていました。しかし、戦局の悪化にともない翌 20 年に入ると二年生も ( 三・四年生はすでに軍需工場などへ動員されていた ) 阿見の海軍航空廠へ動員されました。学校は一年生だけになりましたが、その一年生も各地域の農家に動員されたり、校庭を開墾したりの農作業を行うなど殆ど授業のない生活でした。そして 8 月に終戦。

戦争が終わると、動員されていた二年生以上の生徒達が学校へ戻ってきましたが、終戦直後の混乱は続き、10 月になってようやく授業を中心とする学校生活ができるようになりました。しかし戦中・戦後の疎開等による編入者の増大 ( 昭和 20 年の編入者数は 521 名、21 年 9 月の生徒数は 1638 名 ) で教室には生徒があふれ、一・三年生は午前、二・四年生は午後という複式授業が行われました。満足な教科書もなく、物資不足、とりわけ食

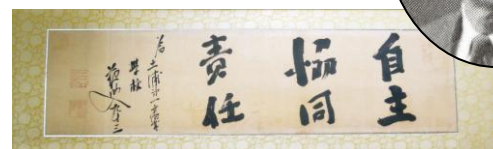
糧難のなか、空腹を抱えての毎日でした。

## 新校訓誕生の経緯

戦後まもなく「教育に関する四大改革指令」など 5 項の指令による、日本社会の民主化は着々と進められました。当時、土浦中学校の今宮千勝校長は「終戦直後は極度な混乱がわが教育界にも襲って来て、教師は教育の指標を失い、生徒は修業の拠り所を失って空白の巷に彷徨した・・・また文部省からして明確な教育上の根本方針も示されず、まして新時代教育の具体的内容に至っては五里霧中の実情。」( 土浦一高進修新聞 27 号・昭和 32 年刊 ) と心を痛め、新しい時代に相応しい人生の指針の必要性を痛感していました。そして昭和 21 年 4 月、新校訓制定に取り組み、5 月の職員会議に校訓制定の基本的方針を示し、校訓制定委員会を組織しました。今宮校長の考え方は「大方の校訓は、ともすると校長一個の志向から出て、或は某古典の中の名文句などを抽出して一方的に作られがちであるが・・・校訓はそうした経緯で作られるべきでなく、・・・校長も職員も生徒も三者一体となって生み出されるべきだと固く信じている」というようにきわめて開明的なものでした。

委員会と職員会議で討議を重ね、生徒の声にも耳を傾け、総意を結集して新校訓は生み出されました。今宮校長は『自主 独立に徹し、協同 大和をなし、責任 本務を果す。この三者が一丸となって人格の中核に育まれるならば、新教育の精神に則る学窓生活はいうまでもなく、これが一体となって人生の行路を照らせば、どんな境遇職域にあ

第 8 代校長今宮千勝先生



校訓「自主 協同 責任」徳富蘇峰書

( この校訓額は現校長室に掲げられています )

つても確固不磨の人生訓となり凡百の諸徳目これに従って生れると解されるではなからうか。』と混乱の中から心胆を砕いて生み出した校訓の精神を存分に生かして欲しいと述べています。

こうして、新校訓は「日本国憲法」が公布された昭和 21 年 11 月 3 日に制定されました。卒業 60 周年を迎えられた先輩たちが中学三年生の時でした。

「日本国憲法」が施行され、本格的な政治体制の改革がスタートするのは半年後の翌年 5 月 3 日であること、また、この憲法の精神に基づいた教育の根本法である「教育基本法」が公布されたのがやはり翌年の 3 月であったことを考えると、これらに先行して制定された本校の新校訓は、新しい日本の方向性を適確に捉え、学校が一丸となって創造したものとして極めて価値あるものといえます。

六十年前にできた本校校訓の至高と意味深さに改めて感じ入るばかりです。